

## 第 3 回検証委員会の指摘事項への対応状況

## (1) 前回までの検証の課題整理と対応状況について

	指摘事項	対応状況
第 2 回委員会	兄島で緊急的にベイトステーションによる対策の実施を要請	資料 2 のとおり

## (2) 過去の事業経緯の検証について

	指摘事項	対応状況
	特になし	

## (3) 環境影響評価のための実証試験の進捗状況について

	指摘事項	対応状況
第 3 回委員会（地域連絡会議構成団体）	ドバトでしか喫食試験をしていないため、資料には「ドバトでは」喫食性が低いと記載すべき	アカガシラカラスバトについては、上野動物園の協力のもと、試験を実施。（資料 3）
第 3 回委員会（ネズミ対策検討委員）	アカガシラカラスバトは無毒餌をよく食べたことが過去の知見で得られているので、再度試験してほしい	
第 3 回委員会（地域連絡会議構成団体）	オガサワラノスリへの影響も今までの認識ではいけない。非標的種の衰弱個体などを積極的に探す監視体制の強化が必要	検証報告書の中で提言としてとりまとめる。
第 3 回委員会（ネズミ対策検討委員）	スローパックが破られて粒剤が出ることもありうるため、鳥類が認識しにくい緑色の粒剤の喫食試験をやってはどうか	指摘事項は殺鼠剤の技術的な改良点である。今回の検証としては緑色のスローパックの影響評価を中心におこなうこととしたい。なお、製薬会社に確認したところ粒剤の直接彩色は成分の変更を伴うため困難であり、海外から試験的に取り寄せることが必要となる。
第 3 回委員会（地域連絡会議構成団体）	オガサワラオオコウモリは緑色に反応する。スローパックの色を元々の黄色、あるいは黒とか鳥類に視認されにくい食べられにくい色に変えた実験が必要	
第 3 回委員会（ネズミ対策検討委員）	殺鼠剤の非標的種への影響を個々で捉えるのではなく、個体群の概念として捉えるべき	アカガシラカラスバトの個体群への影響については、保護増殖検討会で検討（資料 4 - 2）

	指摘事項	対応状況
第 3 回委員会（大河内委員） 第 3 回委員会（ネズミ対策 検討委員）	個体群のリスクについて、オガサワラノスリが何個体、何つがい生息していて、そのうちいくつ死んだかで、どれくらいのダメージかを計算でき、判断材料とすることができる。 林野庁の事業でオガサワラノスリの生息数調査が行われる。	H26 年度環境省事業報告書では弟島、兄島、東島の生息数が調査されている（参考資料 2）。ただし、生息数・繁殖数だけで殺鼠剤の影響を評価するには判断材料が不足している。
第 3 回委員会（地域連絡会 議構成団体）	東京都の調査によってオオガサワラオオコウモリが、兄島にどれくらい生息し、移動するのかの割合も把握できている。餌が少ない時期に殺鼠剤を採餌するリスクが考えられる	過去の兄島での散布はノスリの繁殖影響を回避するために 1~2 月に実施されたが、主な保全対象種の餌資源の質的・量的な季節変化を把握した上で散布時期を選定する必要があることを検証報告書の中で提言としてとりまとめる。
第 3 回委員会（ネズミ対策 検討委員） 第 3 回委員会（大河内委員）	宮古島の散布事業で水系に入る殺鼠剤のフスマによる富栄養化により固有昆虫へ影響が出ているという結果は小笠原にも利用できる 水道局が水質調査をしていると思うので聞いてみるとよい	水底への堆積状況は室内試験で確認（資料 3）
第 3 回委員会（ネズミ対策 検討委員）	クジラ・イルカへの影響について既存資料をまとめてほしい	前回委員会資料で、空散によるクジラへの直接的な影響の因果関係の考察がある。（参考資料 2）
第 3 回委員会（地域連絡会 議構成団体、ネズミ対策 検討委員）	ウミガメ、魚など、人が食べるものの殺鼠剤の残留性を調べてほしい	クサガメ、アカハタで実証試験を実施中（資料 3）
第 3 回委員会（ネズミ対策 検討委員）	オガサワラノスリは、二次毒性による影響を考慮して欲しい	ネズミやオカヤドカリの殺鼠剤の残留性について確認中（資料 3）。
第 3 回委員会（白石委員）	鳥類の毒性についてこれまでは（LD50 が）数千 mg/kg と示されており、今回示された値よりも低い毒性であったことを整理しておくこと	カワラバト（ドバト）の試験結果を資料 3、検証報告書の中で

	指摘事項	対応状況
		提言としてとりまとめる。

## (4) 検証報告書の骨子案について

	指摘事項・意見	対応状況
第3回委員会（ネズミ対策検討委員）	別紙1の手法のメリット・デメリットをわかりやすくまとめてほしい	検証報告書の中で提言としてとりまとめる。
第3回委員会（大河内委員）	ベイトステーションは、環境負荷が少ないと感じているが、第1世代抗凝血性殺鼠剤を使ってコントロールするということは、この先もずっと殺鼠剤を撒き続けることになり、生態系への負荷が大きく、それよりも根絶する方がはるかに生態系への影響が少ない	検証報告書の中で提言としてとりまとめる。
第3回委員会（大河内委員）	再侵入か根絶に失敗したという議論が何度も出てきたが、平成26年のネズミ対策検討会で、海外では2年間ネズミが発見されなければ、根絶とみなすと紹介された。2年間で植物は新芽が出て再生し、その結果を残すので、最低2年発見しなかったことを、根絶に成功したという議論を追加したい	根絶と低密度管理について、情報を整理し、検証報告書の中で提言としてとりまとめる。
第3回委員会（織委員長）	今後のネズミ対策のあり方として、適材適所で手法を組み合わせないとならないことを述べる。以前のプロジェクトでは、空中散布ありきだった。効率性の点から海岸からの流出のリスクを低く見積もってしまったが、実証試験結果から流出のリスクが高いことが分かったので、対策を検討する際の考慮要因として考えてほしいということを、検証内容に入れたい	検証報告書の中で提言としてとりまとめる。
第3回委員会（白石委員）	対策効果の評価について加えること	検証報告書の中で提言としてとりまとめる。
第3回委員会（ネズミ対策検討委員）	米国ではステークホルダー分析をして、住民とプロセスを共有している。いかに住民にわかりやすく説明するかも大切である。	これまでの検証経過として、資料1-1に整理。また、検証報告書の中で提言としてとりまとめる。
第3回委員会（ネズミ対策検討委員）	各論として、今後のネズミ事業への提言として、例えば、クマネズミの生物学的な把握が十分でなかった、ということは報告書に入れられるか	クマネズミの一般的性質（餌嗜好性、警戒性、天敵の有無）と小笠原と本土との性質の違い

		について考察（参考資料 2）。
第 3 回委員会（ネズミ対策検討委員）	過去の事業ではコストパフォーマンスが求められた時期だったが、今後は予算の問題を超えた対応を取るべき	検証報告書の中で提言としてとりまとめる。
第 3 回委員会（大河内委員長）	科学者は予算を踏まえて優先順位を付けて効率化して対策を講じることをすべきだった	
第 3 回委員会（白石委員）	環境省は科学者の言うことを聞いているばかりではなく、行政的な判断をすることも必要だった	
第 3 回委員会（大河内委員長）	科学委員会から広い観点から意見が出て、地域連絡会議で、ある程度住民の意識が集約され、事業者としての環境省、東京都、林野庁が事業を実施する流れであるが、この流れが緩んでいた	地域の合意形成のあり方については、世界自然遺産地域の管理の全体の課題として、管理機関が取り組んでいく予定。
第 3 回委員会（大河内委員長）	問題や国の事業が住民のわからないところで進んでいることは、ネズミ対策検証委員会だけの問題ではないため議論していかないといけない	
第 3 回委員会（ネズミ対策検討委員）	報告書の提言として、手法の改良の提言が必要。ヘリコプターの片側から空中散布する手法、GPS のプログラミングによりヘリコプターを確実な経路で飛ばす方法、粒剤の防水性を高める、色の工夫など	新しい手法は海外を中心に、今後出てくるので、効果未知の一つ一つの手法を提言に入れるよりも「実効性・確実性の高い手法導入を検討すること」という方向性を検証結果に提言として記載する（参考資料 3）。
第 3 回委員会（地域連絡会議構成団体）	技術情報は、出典を明記し、確認できる必要がある。	出典を明記すべきことを記しており、（第 2 回検証委員会資料）検証結果にも記載する。
第 3 回委員会（地域連絡会議構成団体）	合意形成のプロセス論が欠落していると、また同じ事態が起きる。	これまでの検証経過として、資料 1 - 1 に整理。また、検証報告書の中で提言としてとりまとめる。
第 3 回委員会（織委員長）	技術論になりがちだが、リスクコミュニケーションでは、結果的に意見が間違いであったとしても、住民の意見を入れる思想が大切ということも含めて提言したい	
第 3 回委員会（地域連絡会議構成団体）	骨子案では、報告と提言の 2 本立てになっているが、誰に報告し誰に提言するものか。ターゲットが曖昧になっている。	本検証は、あくまで環境省事業の検証であるが、検証結果につ

	まずは環境省だが、環境省に限らず、東京都、林野庁も対象になると思うし、公に対して波及する提言であると思う	いはは各行政機関で共有し、今後の対応に生かすことを、検証報告書の中で提言としてとりまとめる。
第3回委員会（織委員長）	環境省事業に対する検証と今後の事業に対する有益な方法を提言する位置づけだと思う。その結果として、具体的にはプロジェクトチームへ手法の選択を地域住民との意見を入れる流れを提言する	
環境省	成果は、環境省はもちろんであるが、科学委員会、地域連絡会議でも共有し、住民説明会を開催する予定である。内容はオープンであり、提言の中身に指摘をいただくことに制限はないため、自由に発言いただき、情報は広く共有する扱いにしたい	
第3回委員会（地域連絡会議構成団体）	別紙2、ネズミ対策を進めるために、住民合意形成は容易ではないが、コミュニケーションをとりながら進める正攻法である。しかし、予算、マンパワーとか環境省だけでは解決できない、ブレークスルーすべき点も含めた提言であるべき。丁寧に物事を運ばないとならないが、スピード感も必要である	検証報告書の中で提言としてとりまとめる。
第3回委員会（織委員長）	報告書は、問題点の検証と改善点、住民合意の必要性、技術、事業実施主体は環境省だけでないことが読み取れる書き方をする。合意形成のプロセスを踏んで島民と意見を反復しないとないが、スピード感をもって地域と連携を取りながら検証したい	
第3回委員会（傍聴者）	有人島を含めたネズミ対策を考えてほしい	有人島のネズミ対策については、本検証委員会では直接の検証対象ではないが、再侵入防止の観点から有人島を含めたネズミ対策の必要性について整理し、検証報告書の中で提言としてとりまとめる。